



すき
芽吹くとき

山口勇子

山口 勇子

みずき芽吹



山口 勇子（やまぐち ゆうこ）

1916年生まれ。広島市出身。

現在、日本民主主義文学同盟員、日本児童文学者協会会員。

主な著書 「荒地地野ばら」「かあさんの野菊」「人形マリー」
「おこりじぞう」（新日本出版社）、「少女期」（理論社）、「貝の鈴」（大日本図書）、「かあさんと呼ばれた日」（草土文化）

みずき芽吹くとき

1984年3月25日 初 版

定価 1600円

著 者 山 口 勇 子
発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区本町1-8-7

発行所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電 話 東京(320) 7111

振替番号 東京 3-13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

みずき芽吹くとき

目次

一章	浅い春	5
二章	川風の町	33
三章	遠い景色	130
四章	町角	232
終章	短い旅	279

カバ・扉装画 小久保 裕

一章 浅い春

繁華街から城跡の石垣に沿って右に折れると、堀端の長い道に出る。雑踏から切り離されたそのあたり一帯は、空気にこごっていないから、もえ出した草のにおいが新鮮にただよってくる。

佐々木秋代は一人で歩いて行く楽しさを、つま先からはずませていると、リズムに乗った歩調が生まれて、足取りが自然に軽くなった。冬の冷たさを残す風がほおに心地よい。夫と子どもと、アパートのまわりの人びと、友だち仲間、そのまん中で仕事のミシンが年がら年中音を立てているから、めったにこんな一人歩きの間はない。一人で心ゆったり堀端を行くという、この瞬間を充分吸い込もうと深呼吸をしたが、そのうち心の底の方から、忘れていた昔のつぶやきがとび出してきて、いそいでのみこんだ。

——秋代はひとりぼっち、ひとり、ひとり。

なんとも低い声だ。

ばかな。わたしはもうずっと前からひとりでなんかない。家族も、友だちもうんといて、忙しくてにぎやかで困るくらいではないか。この一人歩きと、昔のひとりぼっちとはまるで違う。秋代はあわてて胸の奥から湧き出しそうになる、へんなつぶやきを打ち消した。

堀の幅は大して広くもないので、石だたみをゆっくり歩くと、堀むこうの公園の木々が風にゆれるわずかな音まできこえてくる。公園は駿府公園で、静岡市のほぼ中央に位置しており、家康の居城でもあったせいか、いまでもどこかゆったりとしたふんいきを、そのあたりから町全体にまで及ぼしている。

公園外側のこの長い石道からは園内の木々や梅、桃などの開花がどのくらい春めいてきているのか、それはわからない。ただ、あたりの空気と風の具合が園内のさまざまな音と光の加減を伝えてくるのが、いかにも春浅いみずみずしさに感じられた。堀には小さいたいこ橋が一つかかっており、そこが公園の入口になっているので、そこからは園内のごく一部だが窺える。公園の入口から少し入ったところに満開の白梅が美事な枝ぶりをみせている。堀を越し

て石だたみの道まで静かな香りがただよってくるので、佐々木秋代はさそわれて橋むこうの園内をすかしてみた。

数年前にもあの白梅が満開で香りがみちていた、と秋代は同じ季節に同じ場所にきあわせたことを珍しいことのように思ってしまったが、何のことはない、静岡市の駿府公園にやってくるのは三月一日、ビキニデー中央集会有るからで、年は移っても季節は同じ浅春だから公園の梅は咲くし、堀は木々の芽吹きを写して水もぬるむのだ。ただし数年前までは、公園内の集会场で中央集会が開かれていたが、新装の市民会館が堀一つへだてた公園の外側に完成してからはそのちに会場が移された。それで今年は園内には入らずに堀に沿って行くのだ。

佐々木佐平と秋代夫婦はここ何年かのことだが、ビキニデー中央集会にはどちらかが参加している。それは何よりも二人とも広島島の原爆に関わりがあるからだ、東京から広島・長崎までは遠いし、毎年夏の原水爆禁止世界大会に参加するゆとりもないから、せめて静岡には行くときめいている。それで身近な被爆者や、友人仲間をさそっては行くのだ。だが、大体は例年夫の佐平が参加するので、秋代が一九八二年のこの中央集会にやってきたのは数年ぶりの

ことだ。この前にきたときは会場がまだ公園内だったから、たいこ橋を渡って園内に入ったことを秋代は思い出した。

数年前のあのときのことだ。橋を渡り、満開の白梅の香があまり濃いで立ち止まると、後ろから二人連れの声があった。いまが満開ですね、というような二人のやりとりになり返ると、思いがけなく平田義一郎老先生の長身が秋代のすぐ背後にあった。何度か集会などの席でみおぼえていたので一礼すると、平田先生は黒いオーバーコートを風にはためかせ、

「いい香りだ。ああ、あなたはたしかこの間、労政会館の小集会にきていましたね」

と、秋代の顔をのぞきこみ、娘か孫に語りかける口調になった。平和運動の指導者でもあるし、日本の平和と民主主義を育て、守ってこられた先達の一人でもある学者だと、秋代たち夫婦の敬愛していた老先生だ。

「はい、あの……被爆問題のお話のとき」

秋代はいそいでうなずいた。その半月ほど前だった。秋代たちの地域で平田先生は「被爆者援護法と平和的生存権」という、題のいかめしいわりには内容のわかりやすい

話をされたことがある。先生は背すじをのびして二、三度うなずき、それからきゅうに、

「あのときはやられたねえ、あはは」

と、声を立てて笑われた。つられて秋代も笑ったが、相原老人の一件とすぐにわかった。

「がんこそうなご老人だったね」

平田先生はつれの人に、その人も老人だったが、そのときの説明を始められた。

「平和的生存権っていうから、どんなむつかしいことかと思ったら、なんだ、あたりまえにくらすことかといつてね、あの人が」

被爆者の会の相原老人は、がんこでわがまま、きらわれ者で通っている。そのくせ何か集まりがあると、必ずやってくる。あのときも、平田先生の講演の前半からいねむりを始め、秋代たちがはらはらしていると急に目を開き、なあんだ、朝起きておまんまくって、仕事してふろに入って寝る。毎日それを続けることだね、先生。それが平和に生きるってことだ。むつかしくいいたら平和的なんだ、と大声でしゃべり出したのだ。

平田先生の説明に連れの老人も笑い出した。そんなこと

で自然に秋代は二人について歩くようになった。平田先生たち二人は年寄りらしい足取りで公園の道を歩き、話の切れ目がない。だが話はこれから始まるビキニデー中央集会のことでもなければ、核兵器に関することでもなかった。花見の思い出だった。昔は都内でもいくつか梅の名所があったとかで、湯島とか、梅屋敷とか、とあちこちの町名が出てきて、秋代は夢か幻しの昔語りの世界にひきこまれて行くような気がしたものだ。梅林で甘酒の湯のみ片手に白梅、紅梅を眺め、さくらのときは花の下で、ぼたんはなんとか寺、と先生の話はのんびりと続いた。公園の木々の間にはねこやなぎがふくらんだ銀色の芽をのぞかせていたりしたので、秋代の足取りまで一層のんびりとなったことを思い出す。

しかしそんな話題も公園奥の会場に着くまでのことだったが、帰京後佐平に集会の話をしたとき、秋代は静岡行きで最も心に残ったのは平田先生の梅見の話ではなかったろうか、と気がついてくすぐったい気持ちになったりした。お前、なにに行ったのかい、と夫はあきれたが、秋代は老先生の花見の話が心の底に広いつたりとした下敷きを作っていて、その上に自在な感想や討論に対する自分の思

いのようなものを築きあげることができる、と気がついて感謝したものだ。せっかちに駈けつけて、わきみをせずに会場のスローガンのたれ幕に氣をとられていたら、そこから先には進まなかったかもしれない思考の広がりやを、平田先生がはからずもあたえてくださったのだなあ、と秋代はしみりとした。だが同時にくすんと笑いたい気持ちにもなった。老先生のオーバーコートはどうしてあんなにはあつと広がって、風にふくらんでいたのだろう。防寒の役目を果たさない黒いオーバーだった、とそんなことまで思い出したからだ。

平田先生はしかしその後しばらくして亡くなってしまうから、秋代があのととき梅の木をそばで偶然先生に出会ったこと、しかも先生が秋代をおぼえていてくださったことは、ひとしお深い印象となっていまも心にあたったかい。今年のピキニデー中央集会からは、どんな収穫を得て帰ることができただろうか、もう平田先生もおられないし、と思うときゅうに秋代は一人とり残された子ども時代からの風が、じかにまたほおを打つような氣がしてきた。秋代は身近な人たちの死を、つきつけられすぎたこれまでの年月が、すぐにも胸をみたしそうになったので、いそいで梅の

思い出にひきかえした。あのとときの梅見の話は楽しかった、楽しかった、といそいでつぶやくうちに、秋代はまた梅の香につつまれることができた。

佐々木秋代は数年前の、そんな梅に関わることを思い出して一人堀端を歩いたが、まだ開会の時間には間があったので、ゆっくり散歩のような足取りになった。そのうちに堀の一ヵ所が池のように広くなっている所に来た。その奥には水門がある。水門の前には小さなボートもみえたが、その横が水鳥の餌場になっていてアヒルが数羽ひるねをしていた。丁度木もれ日が餌場の板にさし、アヒルたちは日だまりのその場所をえらんで水からあがってきたものとみえる。水の上には白鳥が一羽、ゆったりと浮かんでいた。秋代がみているとむこう岸の石垣の下道を、男と幼児が餌場に下りてきた。男はバケツを持っていて、中から餌をつかみ出し、池にばらまく。すると白鳥がすぐにやってきて、ばらまいた餌は追わずに、男の手に細いくびをくねらせた。よほど馴れているところを見ると、男は餌係りなのだろう。幼児の方は白い帽子を目深かにかぶったまま堀をのぞきこんでいたが、いねむりアヒルの中に駈け込んで、ドンと一足アヒルを追いたてたかと思うと、

「とうちやあん」

と、高く一声呼んだ。その声が秋代の耳の奥までひびいた。針金をびいんと張ってはじいた音のように、まっすぐ耳にとびこんだので秋代は思わず男と幼児とをもう一度みつめ直した。

じつは秋代は、いつ、どこで、ということなく親と幼児の二人一組をみると、いまだに胸の底の方でドキンと脈を打つ。そして親と子のその一組のしぐさをみ届けずにはいられなくなる。いまもそうで、堀むこうの男と幼児の動きに氣をとられ、堀端のさくにもたれた。秋代は親子の一組をみているうちに、自分がいつのまにか小さな子どもになつていくような氣がする。いい年をして、一人の子の母親で、しかもわが子は十歳を越したというのに、なんとしたことかとばかりしい氣がするくせに、とうちゃんまたはかあちゃんと呼ぶ子どもの声にくすぐられて、日頃は忘れていた胸底の箱のふたをあけてしまうのだ。

あのときわたしは白い帽子のあの子くらい年齢だったろうか。さくにもたれ、秋代は水面のうす緑を目の端にうつしながら思った。あたりは野っ原で家もなにもなく、一面色彩がぬけ落ちたようなまん中に、ぼつんと一つ小さな

駅舎があった。なんという駅名であったか知らずじまいだ。広島市から西南の農村で、その山あいを川に沿い、一本道を祖母と幼児の秋代が歩く。休みなく歩くのだが二人の前を行く秋代の父の足にはかなわず、距離ができてしまう。すると祖母は小さい秋代を横だきに抱え、息を切らして走っては追いつく。

「思いなおしてくれんかねえ。秋代をほって行かんでも。こんなに小さい秋代を」

祖母は追いつく度にいうのだが、その声がだんだん小さくなり、ほとんど声にならなくなっていくのを、秋代はどういうわけかいまもおぼえている。横だきに、祖母のわき腹あたりに秋代は押しつけられて、祖母の声をちょうど真下からきくことになり、それで記憶に深く刻みつけられたのかもしれない。押しつけられたまま、目の前の父親を盗みみた。父親は兵隊ぐつのようなぶこつな大きいくつをはき、服もやはりカーキ色の兵隊服だったような氣がする。カーキ色といっても汚れて色目もなくなっており、早くいえばボロ服だった。もとも当時は誰も彼も似たり寄つたりのボロ服だったから、父親だけが特別なさけない身なりをしていたということではなかったらう。戦後まもなくの

ことだった。

父親は、祖母と秋代の二人を一度もふり返ってくれず、石ころの道を兵隊ぐつでふみつけて行く足音だけが、秋代の耳にしみこんだ。駅に着いても父親は無言で自分一枚だけの切符を買い、屋根もないのつべらぼうのプラットホームに出てしまった。改札の木の手すりから祖母はそれでも乗り出してもう一度、

「思いなおしてくれんかねえ」

と、哀願口調の涙声だったが、そのとき汽車が入ってきたので駅員から追われるようにして、祖母と秋代は一足ひき下がった。

汽車といってもあのときの汽車は、ガラクタのおもちゃ箱からひきずり出したような代物で、窓もガラスがなくてわくだけだったように思う。ポー、とあやふやな一声をあげて動き出し、わくだけの窓に父親の横顔がみえ、汽車は走り去ってしまった。

祖母はこんどは秋代の手を急にひっぱって駅の外にとび出し、汽車が野っ原の果てに消えるまで立っていた。汽車が横ゆれにゆれながら遠去かるのを、そのとき秋代はトカゲのしっぽのようだと思った。祖母と二人、また川沿いを

山ふところの西山地区まで帰ったはずだが、その帰途の記憶は秋代にはまったくない。わくだけの窓に横顔をみせた父親は、以来秋代には百パーセント遠い存在となり、遠いある町で死亡したという通知を受けただけで、三十余年が過ぎた。

掘端のさくに寄って、秋代はほんのとき昔のことを、とりとめのない絵のページをくるようにして思い浮かべたが、いつのまにか掘むここの男と幼児はいなくなり、白鳥だけが水門のあたりにゆれて浮かんていた。アヒルの一群は一列になって、餌場近くの水面を何か用事にいそぐようなこっけいなまじめさで泳いでいる。

市民会館の方角から拡声機の声がひびいてきた。開会が近づいたらしい。秋代は石道を急ぎ足になった。秋代は相原のおじいさんをまず見つけなくてはならない。会場入口で、わたしが行くまでじっと待っていてよ、と秋代が念を押したとき相原はおとなしくうなずき、どっこにも行かずに待つとるよ、佐々木さんのいうことならなんでもきく、としおらしかった。相原はがんこ者だが秋代たち夫婦にはどういいうわけかおとなしく従った。がんこな面とおとなしい面がうまく混り合わないで、囲りの者はめんくら

うのだが、秋代は相原のおとなしい面の方に印象が深いので、静岡行きで相原の見張り役だか、つきそい係だかに決められたときも、あっさりひきうけたのだ。相原老人はどこにいるのだろうか。

あの年寄りを一人勝手に動きまわらせては、どこに行つて何をしでかすかわからないから、つきそいが必要だと、これは相原には内緒で、秋代たち港区から静岡に行く者たちが打ち合わせたのだ。相原老人も加えれば五人がビキニデ―中央集会に参加することになった。みなははり切つていたし、その分だけ一層、相原老人も行くといひだしたことにこだわってしまった。相原老人は日頃から、いやがられることばかりしているのだから、不快がられても仕方がない。「オナゴノ子に手もよう出さん」、などという一件もあったのだ。

「いまの若者はいくじがない。好きなオナゴノ子に手もよう出さんとはなさない」。大学生の木谷と邦子が、たまに並んで腰かけているまん前まで行つて、どなったものだ。木谷と邦子は別に恋人同士でも何でもない、学生の友だちだから、なおさら二人とも驚き、あたりの者も言葉につまつて困つた。オナゴノ子なんて、手も出さんなんて、

いやらしいと邦子は憤慨したが、静岡には相原も行くときいた木谷は、「うへっ、あのじいも行くつてか。なら、ばく止めようかなあ」、とうんざりした声をあげたくらいだ。

市民会館前の広場には、人びとのざわめきが活気のある渦を作つていた。若者が芝生の一隅で輪になつて歌の練習をしている。ギターもきこえる。ビラを配る人、仲間を待つ人。そのかたまりが秋代の近づく間にもふくらんで行く。あちこちに笑い声はじけ、セッケンの「日米軍事同盟なくせ」、「日本を核基地にするな」、などの文字が真昼の太陽に光っている。

相原はどこにいるのかとまぶしい日の光をすかして、広場の隅ずみから見渡すと、入口近くの石段の上にちよこんと乗つかつている老人の姿が目止まった。広場の特等席をみつけているわ。秋代はおかしくなったが、よく見ると息はずむ広場の中でぼつんとそこだけ孤独の点を打つたような、さびしい影がただよっていた。ねずみ色のジャンパ―の背中をかがめ、小さい横顔はみえるのだがどこを見ているのかわからない。その姿をみて秋代は、相原のおじいちゃんなどと呼んだりしているが、相原については何も知

ってはいないことに、急に気がついた。

そういえば相原の方からも、秋代にむかって何一つきいたことはない。秋代が幼児のとき母に背負われて祖母のもとに逃げたことも、孤児となった秋代のその後の生活も、何一つきかないくせにすべてをのみこんでいるような、わかりあう者同士のうなずき方をしたりする。「あんたは覚えがないじゃろうが、映画の場面がパッと変わったのと同じよ。気がついたら何もない」、と八月六日のことを秋代に教えるようにいったこともあった。

秋代が相原について知っていることといえば、相原は広島で被爆して、いま一人暮らしだというくらいのことだ。そういえばいつだったか、「逃げて、逃げて、逃げられるものじゃないで」とつぶやいたことがあった。相原老人にとって逃げられぬというその対象はいつたい、なんだろう。原爆孤老と呼ばれる一人になってしまった現在の相原は、年中ねずみ色のジャンパーを着て、しなびた顔をしている。口だけが達者でその上あたり構わず一人のみこみのことをいうので、とかく嫌われるのだが、区内の被爆者の会世話役ということが、ただ一つの生きていくよりどころなのかもしれない。佐々木佐平、秋代夫婦の家が港区

の被爆者やその周辺の人まで含めたたまり場のようになっているので、相原はしょっちゅう中やってくる。老人会館の風呂に入りきた帰りには、手拭い片手に寄って行く。

日陰のない市民会館前の広場は春先の陽光がまぶしい。秋代は相原に近づき、あたりの人びとの笑い声に消されないように大声で呼んだ。

「相原さん、おじいちゃん」

だが相原は気づかず、見当違いの方向をむいている。

「おじいちゃん」

もう一度呼ぶとやっと気がついた。

「おう、佐々木さんか、あー待った、待った」

相原は年寄りにしては身軽な動作で石の上からひいり降りたが、声は泣き出しそうになさげない。

「待ったのなんの」

「あらどうして。開会は午後だから、朝は昔の友人と何十年ぶりにゆっくりくつろぐって、そういつてたからわたしゆっくりきたの」

「それがいやはや、イスカ、イスカ」

相原は自分の頭を平手でたたいた。薄くはげあがった頭だ。イスカノハシノカケチガイ、というのを略して、相原

はよくイスカ、イスカというのだ。昔流のことわざとか、たとえを話のなかに混ぜこんで、相手が理解しなくても一人で得意がる相原だ。イスカもその一つで、相原がしばしば口にする。秋代はほらまた始まったと苦笑した。物事が思うようにいかなかったときに、相原はイスカ、イスカというのだが、相原老人のこんどの静岡旅行も、イスカノハシ……どうも失敗だったらしい。昔のごく親しい友人が静岡に暮らしているから、一日早く行ってその家に泊り、ゆっくりしてから開会の時間には間に合うように会場入口で待っている、といったのだ。静岡にいたというその友人は、戦後の一時期相原と組んで木材関係の商売をした相棒だということだったが、昨夕たずねあてたその家はすでにその友人の息子の家になっていたのだそうだ。「仕方がないから頼みに頼んで、ようやく泊めてはもらったけどねぇ」

相原は小さい肩をもっと小さくすぼめるようにしていた。その息子にきいてみたが、おやじはいなかに引つ込んだというだけで、くわしいことは何一ついってくれん。あいつのことだ。息子とけんか別れたんだらうて。秋代は黙ってきいた。静岡でビキニデー中央集会があるときいた

とき、相原はわしも行く、静岡には昔の友人もおるからそこに泊ればちょうどいい、と大そうなはりきり方だったのだ。おじいさん、疲れてみんなに迷惑かけると困るからやめなさい、と被爆者の会の一人がいったもので、相原はいっそうむきになり、なにが疲れるもんか、前の日から泊まってゆっくりできるんだから、といっけてきかなかった。そのあぐくの静岡行きだったのだ。

「でも泊めてもらったんだから、まあよかったじゃないの」

慰めにもならないことをいって、秋代は疲れ切った老人の顔をのぞきこんだ。

会場はほぼ満員でようやく座席が取れた。港区からの相原を含めた五人は、あちこちに空いた席をみつめて腰かけた。相原のつきそい役の秋代は相原の隣にかけた。場内が暗くなり、スクリーンが巨大にふくれあがるキノコ雲を写し出す。「にんげんをかえせ」、字幕の大文字だ。秋代は見入った。

佐々木秋代も被爆者だ。しかしその記憶はまるでない。西山の谷は、広島から逃げてきた人らで埋まってしもうた。べとべとの人らよのう。秋代は幼児のとき祖母から話

にきいた一九四五年八月六日を、自分の目の内側に自分で組み立ててしまっている。真夏の炎暑が一日中谷間にたまり、人影のない無風の午後は暑さが凝かたになって沈んでいるという谷だった。その谷が一変して人の姿を失った半裸の群で埋まったのだ。お前らが逃げてこん、まだか、まだかと思うとつたら、母ちゃんが秋代をおぶってたどりついた。母ちゃんはおぶいひもが、裸の肩にくいこんでほどけんくらいじゃったよ。背中の秋代も、もう死んだるかと思うた。そしたら、ふとんに寝せたらもう、手足を動かしなかった。秋代が生きたら、母ちゃん、秋代は生きたらよ。そういうときはもう、母ちゃんは息がなかった。遠い西山まで秋代をおぶって逃げるんが精いっぱいじゃったんじやろう。

八月六日にかかわる祖母の話で、秋代が覚えているのはそこまでくらいだ。祖母はその頃広島市外西南の農村、西山地区に一人で暮らしていたから、被爆直後母は秋代を背に西山めざして逃げたのだ。炎をどうやってぐりぬけたのか。背の秋代を無傷に保って、逃げのびた道中の刻々のさまはどのようなものであったのか。母はすっかり自分一人の胸に納めたまま死んでいった。川に沿った一本道を山あい

の西山までたどり着く、そこだけでもずい分の道のりだ。足にも傷を負っていたという母は、どうやって歩いたことか。秋代は母の息絶えたことも知らず、母の側で祖母からくず湯をのませてもらい、いくらでも飲んだそうだ。

天をつく火柱が傘を広げてキノコ雲に変じたという、その火の色まで秋代は実際に見て知っているような気がするのだが、それも後日人から聞き知ったことや、写真や本などで得た知識が幾重にも積みあげられて、実際に似た色彩をつけて造形されたものだ。いま秋代の目の奥にきつちりとはめこまれている被爆にかかわることは、すべてそうやって築いてきたものだ。じっさいには秋代は何一つ覚えていない。

映画の場面は長崎、広島市の被爆直後の火傷の人を写す。次に、重ねるようにして三十余年後の現在のその人を写す。ケロイドの顔が年数を経たいまはそれなりに固まり、若い女性や少年であった顔が中年の顔になって写されている。映画に気をとられて気づかなかったが、いつのまにか隣の相原の席が空になっていた。トイレにでも行ったのかとそのまま秋代はまた画面に吸いよせられた。

幼い秋代と母親がその頃暮らしていた広島の家、といっ